

一切智者論から見た「人間」

佐藤智岳（九州大学）

発表要旨

仏陀、世尊があらゆる物事を知る者、つまり一切智者であるという主張は、仏教史の初期の段階からなされた。これに対して、ヴェーダ聖典を権威とするバラモン正統派という仏教外から反駁が加えられる。とくに七世紀前半に活躍したバラモン正統派であるミーマーンサー学派の重要人物であるクマーリラによって徹底した批判が行われている。彼は、「宗教的な果報をもたらす法 (dharma) は感覚器官で捉えることができるものではなく、したがって法を含む全ての物事を知る人間は存在しない」と主張する。

クマーリラによる批判の約 100 年後、仏教徒シャーンタラクシタ、直弟子カマラシーラによって『タットヴァサングラハ』、その注釈が著される。最終章では、そのクマーリラの批判に反論しつつ、「一切智者 (sarvajña)」に関する広範かつ精緻な議論を展開している。彼らの目的は、単に全ての物事を知る人間の論証ではなく、「法」を認識した者である仏陀の論証である。

彼らが論証しようとした一切智者とは、卓越した人間 (puruṣaviśeṣa) とも表現される、世尊のことである。カマラシーラは、一切智者を「煩惱障と所知障の除去に基づく」と規定している。煩惱障とは我見に基づく煩惱であり、所知障とは、経験領域にある取捨すべき真実に関しても全ての形象 (ākāra) を知り尽くしていないこと、しかもそのため、様々な手段によって四諦を人々に説明できないことである。そのうち煩惱障は、無我を直接知覚することで除去される。さらに所知障除去のためには、その無我見を注意深く中断なく長時にわたって修習する必要がある。つまり所知障除去のためには、まず煩惱障を除去する必要がある。

本発表では、(1) 二障を除去した者、(2) 煩惱障だけ除去した者、(3) どちらも除去していない者、という三つの分類を通して、まず一切智者論から見た「人間」を確認したい。

(1) 哀れみ (karuṇā) を持つ者は、無我の修習を繰り返し行い続け、二障を除去した者であり、一切智者である。

(2) 煩惱障のみを除去した者は、声聞・独覚である。彼らは、無我見を繰り返し修習せず所知障を断じていないので一切智者ではない。

(3) どちらも断じていない者は、上記の (1) (2) 以外の者である。彼らには誤った我見によって生じた煩惱がある。さらに煩惱の原因とされる我見は、無始爾來のものとされ、根深いものであるといえる。

次に、これらの三者の違いが生じる原因を、「動機」「本性」という点から考える。以上の作業を通して、一切智者論から見た「人間」を定義したい。

〈キーワード：一切智者、『タットヴァサングラハ』、二障、我見、無我見〉